

「総ぐるみ」新聞

NPO総ぐるみ福祉の会事務所は日限山4・44・23（八四四一七四七七）
入会や活動のお問い合わせ先は、事務所または「日限山荘」日限山4・7・1

悪天候の中、日限山荘でお花見会を開催

今年の「NPO総ぐるみ福祉の会」のお花見会は、四月二日(金)と決め、お花見会場を、例年の舞岡公園から西洗第三公園に移すことにして、皆様にお知らせしていました。

桜の開花は例年より早かったものの、早春の天気は不安定で、曇りの日や低温傾向が続きました。お花見会当日は、桜は八分咲きになっていましたが、前夜から嵐のような強い南風と雨が続き、残念ながら、日限山荘での食事会となり、三十八名の参加がありました。

「この日の献立」

- 太巻き寿司
- 混ぜご飯
- コロケとポテトフライ（購入）
- 豚汁（寺島さんご寄贈）
- ゆで卵（大橋さんご寄贈）
- ぬか漬け（右に同じ）
- 桜まんじゅう・チョコレート（購入）

●巻き寿司づくりに挑戦

掛川 史子

お花見会当日、お手伝いをするつもりで早めに日限山荘に伺ったところ、いつもごちそうになっていては、笹路さんの巻き寿司の作り方を、直接ご伝授いただける事になりました。中に入れる卵焼き、鰻の蒲焼き、甘辛く煮

た椎茸・かんぴょう、胡瓜、でんぶは、前もって笹路さんがご用意くださいました。笹路さん考案の巻き寿司器の木型を使い、まず見本の太巻きを作ってくださいました。

私は、初めての挑戦で一本目はうまく出来ませんでした。二本目はなんとかまずまずの出来となりました。切り口は、先程の具材がきれいな配色となり、桜でんぶのピンク色がかわいらしく、春を感じます。たくさん並んだご馳走を、遠足気分美味しくいただきました。

●お花見会で感じたこと

新見 宏

今年のお花見会は、あいにくの悪天候で、急遽日限山荘での昼食会になりました。それでも多くの方々に参加され、歌声も賑やかに盛会で何よりでした。

ただ一つ残念に思い、ちよつと悲しく感じたのは、お花見の場所のことです。例年の舞岡公園から、今年は第三公園に変更となりました。木の根や凹凸のある舞岡公園に登っていくのが大変・不安等の理由からでした。加齢による衰えは防げませんが、皆でカバーして、舞岡の満開の桜の木の下で、お花見が出来ないものかと思つたことです。

●来年こそ桜の木の下でのお花見を！

大橋 綾子

満開の桜の木の下で宴会を行うことを想定して、ブルーシートを敷く人、料理を作る人などの役割分担を決めていましたが、当日は、あいにく春の嵐の悪天候でした。

日限山荘のテーブルには、笹路さんの巻き寿司他たくさんのご馳走が並び、にぎやかな宴会となりました。私も早朝から赤玉のゆで卵五〇個を作り、漬物と共に持参しました。当NPOの野外イベントは唯一お花見会です。来年は桜の木の下でゆで卵をいただきます。皆様と語り合うことを楽しみにしています。

●叙情歌大合唱で盛り上がった食事会

石塚 俊博

前日は快晴、柏尾川の桜を見て来ましたが「花見とは、気のおけない仲間と花吹雪を浴びながら酒を酌み交わす年に一度の饗宴のこと」河川敷では何組か始まっていました。二日は無情にも雨。かくして今年のお花見は、暖房・カラオケ付きの日限山荘二階での、春高樓の花の宴となりました。おなじみの顔が集まり、皆さんすでにかなりご機嫌。

まずは乾杯！カラオケからは懐かしの抒情歌が流れて宴は最高潮。やがて松永さんのリードで「花の歌」の大合唱。私も負けずに声張り上げて、合唱に加わりました。「年寄りの一つ年とる花見して 平畑 静塔」私も今月は誕生月、至福のひと時でした。

介護保険サービスを利用したいのですが……(その6) 訪問先で行う身体介護サービスの実際

NPO総ぐるみ福祉の会副理事長 一柳 朗

今号からは、NPO総ぐるみ福祉の会が提供する介護保険サービスとはどんなものかについてお話ししましょう。

当会の介護保険を利用している利用者の皆さんは昨年4月から今年3月までの一年間で延べ約400人、サービスの提供回数は約4200回を数えました。

当会が提供するの訪問介護サービス、つまり利用者さんの自宅にヘルパーを派遣して行うサービスです。ほかに当会の得意とする移送サービスや要支援1、2の利用者さんが要介護状態になることを予防する介護予防訪問介護もありますが、それらについては稿を改めて解説します。

一方、当会に派遣登録をしているヘルパーは現在27人。ほとんどの場合は直行直帰で訪問介護サービスを行います。つまり毎日のスケジュール表に従い、利用者さんのお宅に自宅から直接行って、指示された内容のサービスを提供し、仕事が終わったら、報告書を書いて、帰るということになります。

訪問介護サービスは大きく分けて「生活援助」と「身体介護」に分類されます。

●「身体介護」ってどんなサービス？

これに対して「身体介護」とは、①利用者

さんの身体に直接触れて行う介助サービスの中で、②利用者さんが日常生活を営むのに必要な機能向上等のための介助であり、③その他専門的知識・技術をもって行う利用者さんの日常生活上・社会生活上のためのサービスとされています。

●「食事介助」から見た介護の実際

訪問介護サービスの大半が身体介護です。具体的な例でいえば、食事、排泄、体位変換、入浴などの介助をするサービス。言葉で書くとかんたんですが、これらの仕事はなかなか大変です。食事一つをとってみても、次のような段取りになります。

まず利用者さんに「そろそろお食事にしませうね」などと声をかけて覚醒を確認します。このとき誤嚥の兆候がないかなど安全も確認します。次に手洗い(場合によって排泄も)を介助し、エプロン・タオル・おしぼりなど食前の準備をし、食事場所の環境を整備します。介護を必要とする利用者さんの場合、ベッドで食事を摂ることが多く、ベッド上の座位を確保することも重要です。

準備ができたところで配膳を行い、利用者さんが安心して食べられるようにメニューや材料の説明をしながら、おかずを刻んだり、つぶしたり、吸い呑みで水分を補給したりします。嚥下困難な方の場合は、食事は流動食となりますので専門的知識や技術が要求されます。また殆どの方の場合、食事中や食

後の服薬介助が伴います。この際、実際に飲んだクスリを記録し、あとで勝手に飲んでしまわないように保管にも気を配ります。

こうして食事が終わると、再び安楽な姿勢がとれるよう介助し、気分を確認し、食べこぼしの処理を行います。その後はエプロンやタオルなどの洗濯、下膳、残滓の処理、食器洗いなどの後始末となります。

身体介護をしていく上で、最もデリケートな問題が「排泄介助」です。排泄ぐらひは誰も自分でしたいと思うのは当然で、たとえ寝たきりになってしまったお年寄りも、できれば人の助けを借りたくないと言います。床ずれ防止のためにも、ヘルパーの介助でなるべく体を起こして、トイレに行くのが望ましいことなのです。

●訪問先ごとに適切な対応が必要

実は、ヘルパーが本当に難しいと感じるのは上述したような介護技術や知識ではありません。そもそも家庭の中に入って行うヘルパーの仕事には、「その家庭のやり方に従ってほしい」ということがついてまわります。そこで必要なのが訪問先のお宅のそれぞれに合わせた臨機応変な対応です。

たとえば、利用者さんのために思って、賞味期限が切れた食材を捨てたところ、後で、「あのヘルパーは人の家の食べ物を勝手にどんどん処分してしまう」というクレームになったりすることもあります。

どういふ言い方、態度であれば、利用者さんに満足してもらえるかを感じとる感受性、コミュニケーション能力が、ヘルパーには求められるのです。

(以下次号)